「似合う万年筆」価格の法則

柳沢克央（高校教員）

師走に入って間もないある日、かつての教え子から同窓会の招待状が舞い込んだ。期日は年明けの２日夜。彼らが私の転勤前の高校を卒業したのが２００９年３月だから、いま25～26歳、ほとんどがフレッシュな社会人だ。

添え書きに「余興でビンゴゲームをするから、先生方は何か賞品になるものを見つくろって持ってきてくれ」とある。妻に話すと「ぜひ行ってくるといいよ」と背中を押された。文面から数千円から１万円相当の賞品を持って行くべきであろうと推察した。

「教え子と酒を酌み交わせるようになったんだから、スコッチウイスキーにしようか」と私。「女の子はピンと来ないだろうし、重くて大変かも」と妻。

とりあえず、20年間愛用のペリカンスーベレーンＭ８００（緑縞）のキャップをひねり、喜んで出席する旨の返事をしたためて投函した。

＊

熟考の末、賞品にはやはり万年筆が最適だと判断した。妻も賛成。ただし、普通の贈り物とは違う。相手が男女どちらになっても、それなりに似合う品を選ぶ必要がある。

週末にネットで検索して『万年筆のすべて』や『趣味の文具箱』なる本・季刊誌があることを知り、早速注文する。

さらに検索し、予算に適う品があることを発見。商品レビューを読むと、評判もなかなか良い。我が本命はプラチナの#３７７６センチュリー、色はシャルトルブルーだ。

手に取って確かめるために百貨店に電話をして、この品があることを確認した。翌日、勤め帰りに実物に対面。紫に近い深青色で非常に美しい。Ｍニブの試し書きをする。インクはパーカーだとか。Ｍ８００（Ｍニブ）よりも字幅が細くてやや硬めの書き味。ただしガリガリではなくサリサリという感じ。「それはそうだな、ペリカンは18Ｋでこっちは14Ｋだもの。若い人の普段使いにはこの方が良いかも」。

店員さんにビンゴゲームの賞品にする旨を話すと、「それでしたら、私もぜひこちらのお品が宜しいかと思います」と。本はまだ届いていないのだが、これで決まりである。

ブルーブラックのスペアカートリッジ10本詰もケース内に収まったのは幸い。男女問わず初めての人にも、２本目、３本目となる人にも大丈夫だろう。私も自分用に欲しいくらいだ。まずは良い買い物ができた（…と思う）。

＊

それから１週間ほど経ったある日、妻が突然、「犬を飼いたい」と言い出したのには驚いた。訊けばショッピングモールで「ひと目ぼれ」した「彼氏」がいるらしい。どうしたものか。

ここは「条件闘争」でいこう。

「自家用ジェット機を買ってくれるなら、ＯＫするよ」と私。少し考えて「買ってもいいけど、置いておくところがないわね」と妻。「じゃあ、愛人を持つことを認めてくれ。自動車評論家の故Ｔさんは愛人が４人もいたとか」と私。すかさず「持てるもんなら、持ってみやがれ！（笑）」と妻。…仕方がない。ハードルを下げよう。「じゃあ、万年筆を買わせてくれ」と私。妻は「お風呂に入りながら考えたい」と言う。風呂から出るとあっさり「お好きなものをどうぞ」。妻の気が変わらないうちにスーベレーンＭ１０００（黒軸・Ｂニブ）を購入することでめでたく「交渉妥結」。欣喜雀躍。お犬さまさま。

＊

翌日、いつものように出勤してまだ誰もいない化学研究室へ。暖房をつけて、コーヒーを淹れる。出来上がりを待っている間、仕事用のペリカーノジュニアで落書きもどきをすることを思いつく。

中高生にはパイロットカクノやペリカーノジュニアが、大学生にはラミーサファリあたりがよく似合う。「これらの単価とそれが似合う年齢って何か綺麗な数式にならないかな…」。

数年前、静岡にあるセレクトショップのＨＰで「（男性の）スーツ価格の目安は年収の１％」というブログを読んだことがある。いくらの万年筆を買おうが自由で余計なお世話だけれど、今度の賞品は贈り物の象徴としての意味を持つ。世間相場に見合っているという裏付けのようなものが欲しいのだ。

「比例ではなさそうだな…」云々と心の中でひとりごちながら色々と試みる。電卓をたたきつつ10分ほどメモ用紙上で格闘した末、ついに

（年齢の3乗）÷2＝（似合う万年筆の価格）

という「法則」を獲得した。

たとえば、20歳ならば、

20×20×20÷2＝4000円

となり、ラミーサファリがドンピシャリである。

また、40歳では、

40×40×40÷2＝32000円

で、カスタム743やプロフェッショナルギアレアロ、M300あたりが該当する。

さらに、60歳になると、

60×60×60÷2＝108000円

となり、各社のハイエンドモデルが当てはまる。

肝心かなめの26歳だと、

26×26×26÷2＝8788円

となり、センチュリー等がほぼピッタリ。

52歳の私にとってもM1000はほぼ相応となり、ますますめでたい。

ちなみに70歳、80歳、90歳ともなれば、蒔絵でも彫金でも限定品でもお好きにどうぞという感じになってくるのはご愛敬。

思い切り飛んで7歳で計算すれば、プラチナプレピーの価格とほぼ一致。人生は3次元空間で展開されている。なぜ2で割るかは説明不能だが、目安としてはなかなかのものではなかろうか。ただし万年筆の森を分け入る道は公道ではないのでアクセル・ブレーキは個人の自由だ。

清澄なる空気満ちる信州の朝、淹れたてのコーヒーがことのほか旨い。ＰＪに感謝。

＊

思いがけず手にすることになったフワフワのM1000で賀状を仕上げ、「もういくつ寝るとお正月…」という歌の通りの気分で年末を過ごした。

大掃除の後で久々に卒業記念アルバムを引っ張り出し、密かに「予習・復習」などを。M1000で教え子たちのフルネームと進路先を繰り返し書きながら何度も復誦したことは本当のところ「企業秘密」である。

特に初夢も見ずに正月2日の同窓会を迎える。卒業人数の約半数にあたる約140名が出席。立派に成長し紳士淑女となった元生徒たち、元同僚たちと共に再会を祝して乾杯、そして時を忘れてしばし歓談。お目出度い話もちらほら。

ビンゴゲームの賞品には定番の高級メロンやしゃぶしゃぶ目録、さらに電子書籍リーダー、ロボット掃除機、折り畳み式自転車なども登場。受賞者は自己紹介をし、近況報告のインタビューを受けていた。

さて、「正統なる理論的背景」を持つ我が賞品を射止めたのは私の担任クラスのX君だった。この春、某県庁職員として採用が内定とのこと。

「万年筆は持っていないので、うれしいです」とX君。さっそく『万年筆のすべて』と一緒に賞品を手渡して握手と記念撮影。輝く笑顔。盛大な拍手あり。X君、そしてここに集ったすべての人に幸多かれ！

＊

我が家の一員にシープーの「ぐうちゃん」が加わって、幸先の良い1年のスタートだ。平凡でもいいから王道を歩む日々を過ごしたいものだと思う。

おっと、忘れないうちに同窓会で話した紳士淑女たちの近況などを書き留めておかなければ。さて、どちらのペンがいいだろうか。（終）